



ワールドトークRPG! 1

W O R L D T O K U R P G !

しろやぎ
Shiroyagi



アルファライト文庫 

主な
登場人物
Main
Characters

メテオ・
ブランディッシュ

本編の主人公。伝説のパーティ
シューティングスター
「流れ星」のリーダーで、お茶
ウォルスタの魔術師ギルドの長。

石井先輩

テーブルトークRPGの
ゲームマスター。
事故で死んで
しまったのだが……？

ハム

ウォルスタ自警団長。
武器マニアな戦士。
メテオの仲間。

リーズン

ウォルスタの領主。エルフで
精霊使い。メテオの仲間。

メル

メテオの護衛を
している戦士。
無邪気な性格。

アーティア

ウォルスタの商業神殿長。
しゆせんじ
守銭奴。メテオの仲間。

エステル

メテオの弟子で魔術師。
賢者レベルが高い。

多しなことだろう。

あまり表に出ないが、水面下でプレイし続けているテーブルトークRPGプレイヤーも

ファンは多い。

都心のゲームショップなどに行くと、今でも有志によるゲームコンベンション開催のチ

ラシが置いてある。

インターネットどころか、まともなTVゲームさえなかった時代に生まれ、コンピュー

タのゲームがどんどん豪華^{ゴージャス}絢爛^{カラフル}になるにつれ廃^{マヒ}れていった感はあるものの、いまだにその

ファンは多い。

いってしまえば、大人の『ごっこ遊び』である。

テーブルトークRPGというものをご存知だろうか？

紙と鉛筆とダイス、気の合う仲間とゲームマスターという進行役、そしてルールブック

さえあればできる、RPGの元祖みたいなものだ。

ルールに従った設定を決め、ダイスという、偶然発生装置^{ランダム}を使い、プレイヤーとゲー

ムマスターがその偶然をまとめ上げてひとつのシナリオを作る。

プロローグ

アータレウRPG

キャラクター名

メテオ・ブランディッシュ

種族名

ヒューマン

性別

男

年齢

26 (16)

職業属性

魔法使い

LV スキル名

9 魔術師

3 賢者

経験点

79,510

所持金



キャラクターの肖像・特徴

重要なアイテム等

- ・無限の革袋
- ・魔術師の杖
(魔法の発動体)
- ・リング
(魔法の発動体)

...etc

STR
12

DEX
16

AGI
14

INT
18

VIT
14

MND
18

そして俺、杉村前賢も、そのテーブルトークRPGのプレイヤーであった。自慢じゃないが、半端なプレイヤーではない。

高校時代にテーブルトークRPGのルールブックを持ってきた先輩ゲームマスターとともに、二十年間もやり込み続けてきた——古強者だ。

なに、それくらい珍しくないって？

俺だって二十年くらいの経験はあるぞ？

いやいや、俺たちのパーティは筋金入りだ。

高校時代は毎日のように集まって、セッションをしていた。

その後、大学に入ったり、専門学校に通ったり、就職した仲間もいた。

それでも二十代の終わり頃まで、週に一〜二回はセッションを続けた。

さすがに三十代にもなると、仕事が忙しくなり結婚や出産といった人生のイベントが続き、なかなか集まることはできなかった。

だが根性で、月に一〜二回ほどのペースでセッションを続けてきた。

俺の知る限り、この歳までこのペースでテーブルトークRPGをプレイし続けてきた者はいない。

下らないと思う者もいるだろう。

しかし、これは俺たちが築き上げた冒険の長さ。密かな誇りである。

とはいえ二十年の時間は、穏やかな湖面のように過ぎていったわけではない。

むしろ逆。激動の二十年だったといっている。

メインのメンバーはほぼ全員残っていたが、数回セッションしただけで去った者もいれば、仲違いで抜けていった者もいる。

年が近く、若い男女がひとつのテーブルを囲んでいるものだから、恋愛沙汰でセッション崩壊——といった危機もあった。

メンバーのひとりには前に一児を出産したのだが、じつはセッション中に陣痛を迎えている。

そして、誰にも気が付かれることなく、セッションが終わるまで耐え続けた。

最後に経験点をキャラクターシートという冒険記録用紙に書き付け、

「やった！ レベルが上がったわ!!!」

と叫ぶと同時に破水したのだ。

後に、俺たちと旦那さんにしこたま叱られたのだが、そのときの子供もすくすくと大きくなり、今ではテーブルトークRPG業界の中でもちよっとした語り草になっている。

そしてゲームマスターはゲームマスターで、ゲームのために仕事を決めたようなものだった。

「俺は安定して土日祝にゲームがしたいから公務員になった」

と、公言して実際に役所勤めとなったのだ。
 本人が語ることはなかったが、大学在学中から多くの有名ゲームデザイナー集団やゲーム制作会社に声をかけられていたらしい。

それらを惜しいとも思わず、彼は俺たちとゲームをすることを選んだ。

他のメンバーも程度の差こそあれ、似たようなものだったはずだ。
 幾多の荒波に揉まれて残った七人のパーティメンバー。

いや、ひとりはゲームマスター役なので、実際のパーティとしては六人だ。しかし二十
 年もの間、個性的なメンバーたちをまとめ上げ、飽きもさせずにセッションを続けた敬愛
 するゲームマスターを仲間はずれになどできやしない。

あえていおう。

この七人は最高のパーティメンバーであったと。

つい、一週間前までは。

ゲームマスターである石井先輩が、交通事故で亡くなった。

俺は今、自室の机の前にいる。

机には、俺のキャラクターシートとふたつの六面ダイス。

キャラクターシートとは、テーブルトークRPGで使用するキャラクターの情報を書いた紙だ。

通常、キャラクターシートの記入には鉛筆やシャープペンを使う。VIT（体力）とMN（精神力）の消費や回復といった数値の変動、アイテムの増減はそのつど消しゴムで消し、書き込まないといけない。

故にすぐ、シートはボロボロになってしまふ。

このシートだって、もう何枚目かわからない。

ボロくなるたびに新しく書き換えるからだ。

古くなったキャラクターシートから真新しいキャラクターシートにデータを書き写す。

これがなんとも楽しい。

キャラクターシートが新しくなると、今まで雑多に記入していたアイテム欄などもすつきりするし、おまけに、書くスペースが増えてちよつと嬉しい。

だが、古いキャラクターシートも愛着があつて結局捨てられない。

そんなセッションの思い出が、俺の心をよぎる。

二度と戻らぬあの時間が、そのまま万力のように心を締め付ける。

石井先輩は高校時代、俺をテーブルトークに誘ってくれた人で、ひとつ上の学年だった。学校を卒業した後も、俺はしつこく「センパイ」と呼んだ。

石井先輩も嫌がるふうではなかったもので、二十年近くもその呼称を使い続けた。俺は自分のキャラクターシートを眺める。

〔名前〕メテオ・ブランディッシュ

〔性別〕男

〔年齢〕26(16)歳

〔種族〕人間^{ヒューマン}

〔職業属性〕魔法使い

■パラメーター■

STR || 12
筋力
 DEX || 16
器用さ
 AGI || 14
素早さ
 INT || 18
知性
 VIT || 14
体力
 MND || 18
精神力

■スキル■

魔術師Lv9

賢者Lv3

『アヤタレウ』と名付けられたそのゲームは、当時大ブームだったテーブルトークRPGシステムで、今でも続編が作られ続けている。

すでにバージョン3くらいまであり、初代システムは時代遅れといえなくもない。しかし俺たちは、初代『アヤタレウ』のシステムを二十年間やりこみ続けてきた。

もちろん、たまには違うシステムをプレイしたこともある。

だが、結局『アヤタレウ』の世界に戻ってきてしまった。

「やはりというか、このメンツが初めて全員揃ったゲームだからか、思い入れが違うな」と、石井先輩はよく頷いていたものだ。

『アヤタレウ』は、極めて平凡で汎用性の高いゲームシステムが売りだった。スキルは10レベルでカンスト。

つまり、俺はあと1レベルでカウンターストップ。

『アヤータレウ』世界における最高レベルのスキルマスターになるはずだった。

「ついに俺は《隕石落とし》を使うことができなかつたよ。……センパイ」

《隕石落とし》は、魔術師10レベルの者が使える最高位魔法のひとつで、目標に対して小さいながらも隕石を落とすという強力な超広範囲攻撃魔法だ。

俺は、この魔法を自力で使うことを夢見て『アヤータレウ』をプレイしていたといつても過言ではない。

その決意は、キャラクター名を見ても明らかだ。

ちなみに、魔術師レベル10になるには、とんでもない経験点が必要となる。

どれくらい必要なのかといえば、魔術師1レベルから9レベルの間に必要となったすべての経験点の合計を上回るほどだ。

魔術師は、戦士や盗賊スキルが10レベルとなる段階でやつと8レベルというくらいに成長が遅い。

『アヤータレウ』の世界では、もつとも成長するのが遅いスキルだ。

「あと一回ぶんの冒険で、レベルが上がるはずだったんだ……」

俺は、キャラクターシートのわきにある、ふたつの六面ダイスを眺めながら呟く。

このダイスは、石井先輩がマスターのときに使っていたもの。

そう、『遺品』というやつだ。

石井先輩のご両親から形見分けでいただいたものだ。

「糞ッ!!」

耐えきれず両の拳で机を叩く。

「糞ッ!! なんで……!! どうして死んじまつたんだ、センパイ!! どうして俺を……俺たちを置いて勝手に死にやがった!! 俺はどうするんだ!! メテオはどうすんだ!! 他のメンバーたちだって……みんなだって……!!」

二度三度机を叩くも、気持ちはおさまらない。

おさまるはずがない。

「あんたはあの世界の神様みたいなもんだろ……!! 神様が死んでどうするんだよ……!!? 残ったメテオたちはどうすんだ!? 無責任だろ……!! どうせ死ぬなら、責任持ってこの世界にけじめをつけてから死んだっていいじゃねえか……!! 何で俺たちを置いて勝手に……突然くたばってるんだよ……!!……!!……!!」

あとから思えばひどい言い草だが、このときの俺は冷静ではなかつた。

人生の半分以上、妄想現実とはいえ生死をともにして、冒険を繰り返してきた仲間だ。

身近な人間の死のつらさを、もつとも身近な人間が死ぬことで初めて体験させられた。やや歪んだ発露であつたとは思うが、嘘偽りのない言葉だった。

「……また、一緒に冒険しましょうよ……センパイ……」

俺は力なく机に突っ伏す。
肘がダイスを弾き、ころころと床に落ちる。
出目は六・六。
ゾロ目だ。
突如、俺の意識は暗転した。

1 オーバーレベルアップ

夢から覚めたような自然さで、俺はそこにいた。
文豪が使っているような、かなり上質で重厚な木製の机の前に座っていた。
おかしい。さっきまで俺は、PCが置いてある、スチール製のどこにでもある作業机に座っていたはずだ。

机の上には、鶯ペンとインクの壺、羊皮紙に書物の類。

(中世か!!)

と心の中でツツコミを入れる。
それくらいの余裕はあるようだ。

じつと手を見る。

うむ、白魚のような美しい手……

「……つて、オイ!!!!!!」

今度のツツコミは、俺の人生でもっとも鋭い、ひとりノリツツコミであるのは間違いない。

「この姿はもしかして……」

ぐらりと目眩がした。

(ありえない)

我が身の置かれた状況を客観的に眺めてみよう。

ここは部屋だ。えらく中世風だが、かなり上等なタイプの部屋で、俺は今そこにいる。
置いてある調度品など見たこともないものばかりのはず……だが、どういうわけか俺はこの部屋を知っている。

見たことはないが、すべての調度品が俺の心に、

(ここはお前の執務室だ)

と語りかけてくる。

(……ああ、そうだ。ここは俺の執務室だ。忘れるわけがない)

忘れるものか。ここは、俺たちのパーティが作った町、俺が作った魔術師ギルド、その

ギルド内にある、俺専用の執務室……

「俺はメテオになったのか」

声に出した答えは、それが当然といわんばかりの自然さで、ストンと心のどこかに落ち着いた。

「……まず、状況を整理しよう」

今まで座ったことがないはずだが、妙に使い慣れた執務室のイスに座り直す。

「リアルな夢という可能性も、なくはないし……」

そう考えると、がぜん気が楽になった。

そうだ、これは夢に違いない。すべすべの高級な手触りの肘掛けがかつてない存在感で「欺瞞だ、現実を見ろ」といつている気がしなくもないが、ひとまずこれは夢ということにしよう。

「そういや俺、あともうちょっとでレベル10になれたんだよな」

自分がテーブルトークRPGのキャラクターであるメテオだと仮定した場合、当然気にかかるのは現在のパラメーターだ。

（キャラクターシートとかないだろうし、どう確認するんだ）

心でそう思った瞬間、目の前に使い慣れたキャラクターシートと、俺が記人に使って



たシャーペン——すっかり0.4ミリ芯タイプ（俺は、0.4ミリ芯の2Bがもつともキャラクターシートに記入しやすい、と確信している）が現れた。

「ずいぶん至れり尽くせりな夢だな」

突如目の前に現れた見慣れたキャラクターシート。俺の記憶と寸分たがわぬ……そう、右端の茶色いシミは、俺がセッション中に助六を食べていて、うっかり醬油をこぼしたときのシミ。

いや、そんなこととはどうでもいいんだ。

見慣れたキャラクターシートには、ひとつだけ大きく違う点があった。

『経験点＝5104560点』

「……いちじゅうひやくせんまんじゅうまんひゃつ……百万!?」

なんだこの経験点。

「『アヤタレウ』の常識を超えたケタ数だぞ……」

『アヤタレウ』のシステムにおいて、この数値は異常だ。もつとも上がりにくいスキルである魔術師がレベル9から10に上がるときの必要経験点ですら8万点だ。

「おいおい。夢だからって、経験点の大盤振る舞いにもほどがあるぜ……」

俺はちよっぴり涙目になった。

『アヤタレウ』のシステムでは、セッション終了時にマスターが成果に応じて経験点を

プレイヤーに与える。

一般的には、一回冒険を終える——例えばゴブリン退治をしたら、パーティ全員に1000点の経験点を与える、といった感じだ。

だが、石井先輩はこと経験点の与え方については渋かった。その渋さは常軌を逸していたといつても過言ではない。

「よし、今日のセッションでは、きみたちはあわや世界が破滅するところを回避した。よって本日の経験点は大サービスで、ひとり750点を受け取りたまえ!!」

どんなに成功した冒険でも、一回のセッションで与える経験点が1000点を超えることは絶対になかった。初めのころ、メンバーたちはそれについて毎度異議申し立てをしたものだが、先輩がそのスタンスを崩すことはついに一度もなかった。

思えば、二十年もの長きにわたって同じパーティで冒険をしてこられたのも、石井先輩が限界まで経験点報酬を削ったおかげかもしれない。

俺たちも三十代になるころには、安易な成長よりも、パーティメンバーが集まって冒険をすることに重きを置いたロールプレイをしていた。

魔術師よりも成長が早いスキルである、俺以外のメンバーは、主要スキルをほぼカンストして、俺が10レベルの魔術師になるのを待っていた感すらある。

「大奮発だな、こりゃあ」

絹きぬのような肌触りのローブの袖口そでぐちで涙をぬぐう。そして持ち慣れたシャーペンと、やはりよく使ったカドがいつぱいある消しゴムを、手元に寄せた。
 (よし、だったらお言葉に甘えさせてもらうぞ)

「名前」メテオ・ブランディッシュ

「性別」男

「年齢」26(16)歳

「種族」人間

「職業属性」魔法使い

■パラメーター■

STR 12

DEX 16

AGI 14

INT 18

VIT 14

MND 18

■スキル■

魔術師 Lv 9

賢者 Lv 3

これが俺のパラメーターとスキルだ。

年齢の、26(16)歳サシというのは、セッション内で身体が若返り、成長が止まってしまふ事件があったからだ。現実の俺は三十六歳だが『アヤタレウ』の俺は二十六歳、しかし肉体年齢は十六歳となっている。

俺がメテオ・ブランディッシュを使い始めたのが、まさに十六歳。この若さの肉体で、今この世界にいるのは、なんとも奇妙な話だ。

『アヤタレウ』では、10レベルがいちおうのカンストとなっているが、別売りの追加製品で『オーバーレベル』ができるサポートも出る予定だった。ただ、予定はあったがサポートが出版されることはなく、次のバージョンが発表されてしまったのだが。

というわけで、スキルが10レベルを超えて覚える魔法や能力はないものの、レベルが上

がただただMNDの消費が下がり、魔法の威力も上がる。10レベル以上のレベルアップに必要な経験点は、かつて公式がWEBに公開していた計算式を把握していたので問題ない。また、身体能力のパラメーターも上げることができる。これは基本ルールにも書かれて

いる。
例えば、俺はすでにINTとMNDをブーストしてある。各パラメーターには、一定の数値になると任意のパラメーターを上げられるボーナスポイントがもらえることがあり、それを使ってスキルに応じたパラメーターを底上げしておくのは必須^{ひつと}だった。

もちろん、経験点を使って上げることも可能だ。ただし、ひとつ上げるにも相応の経験点が必要だし、スキルを上げた方が冒険は楽になるので、そうする者は少ないが。

「案外、上げ放題というわけでもないな」

俺はキャラクターシートの文字を書いたり消したりして、熟考^{かま}を重ねる。

キャラクターシートだけでは計算ができないため、手近にあった羊皮紙と鷲^{たづ}ペンをひつつかみ、できるだけ有利な必要経験点の計算を書きつける。

「すべてをつぎ込めば、魔術師レベルを19くらいまで上げられるが……」

「いっそ他のスキルも、10レベルまでカンストさせて……」

「INTとMNDは、思い切りブーストかけたほうがいいよな……」

ぶつぶつとひとりごとを呟^{つぶや}きつつ、ひとまず完成した。思ったよりも時間がかかった気

がする。

「名前」メテオ・ブランディッシュ

「性別」男

「年齢」26(16)歳

「種族」人間

「職業属性」魔法使い

■パラメーター■

STR 12 ↓ 36

DEX 16 ↓ 36

AGI 14 ↓ 34

INT 18 ↓ 118

VIT 14 ↓ 114

MND 18 ↓ 518

■スキル■

魔術師 Lv 9 ↓ 17
 賢者 Lv 3
 精霊使い Lv 0 ↓ 10
 神官 Lv 0 ↓ 10
 盗賊 Lv 0 ↓ 10

残り経験点 717560点

「うわあ、なんだか凄(すご)いことになっちゃったぞ」

テールトークRPGプレイヤーの性(さが)だろう。キャラクターシートの書き付けをしている間は、この異常な状況についても、死別した石井先輩についても、思い悩むことがなかった。

「さてと。夢の中なんだから、魔法のひとつも使えるんだろうな。夢の中でもいいから『隕(メテオ)石(ト)落(ラ)し』を使ってみたいもの……」

「お師匠様(シヨウ)!!!!」

どつばああああん!!!!!!!!!!!!

「会議の時間はとくに過ぎてますよ!! なんていらっしやらないんですか!？」

執務室のドアを蹴(け)破(やぶ)らんばかりの激(げ)しさで闖(ちん)入(にゅう)してきたのは、ひとりの少女(せうじよ)だった。

「ああもう。こんなに羊皮紙(ひつじ)を書き散(ち)らして!!! 羊皮紙(ひつじ)めちゃくちゃ高いんですから、ちよつとは節約(せつやく)してください。しかもなんですか、この数字(すうじ)? 魔法陣(まほうじん)の研究(けんぎゆ)でもしていいんですか?」

呆(あ)け気(け)にとられた俺(おれ)を無視(むし)して、ざくざく机(こ)の上(の上)の羊皮紙(ひつじ)をまとめ、整頓(せいとん)していく。

「いやその……すいません。あれ、俺(おれ)のキャラクターシートは?」

慌(あ)わててキャラクターシートとシャーペン(ペン)を片付(かた)けようとしたのだが、現(あ)れたときと同じような唐突(たうとつ)さで消(き)えていた。

俺(おれ)を不審(ふしん)げに眺(なが)める少女(せうじよ)。年の頃は十五、六(じゅうご、ろく)といったところか。よく見ればかなりの美人(びじん)さんだ。色白(いろしろ)でふっくらしているが、年相応(ねんさうおう)といった感じだ。あと数年(すんねん)もすれば、誰もが振り向(む)くくらい的美貌(びぼう)と体型(ていけい)を誇るだろう。絹製(きんせい)らしき、魔術師(まじゆし)が身に付けるタイプのローブの上(の上)からでも、俺(おれ)の目は誤魔化(ごまか)せない。

「……お師匠様(シヨウ)、どうしたんですか『俺(おれ)』だなんて。しかも目が据(す)わってますよ。商人(しょうにん)ギルドのおじさんみたいです」

少女(せうじよ)は羊皮紙(ひつじ)を抱(かか)えたまま、じとつとした目で俺(おれ)を見つめた。

「時間(じかん)になっても会議(かいぎ)に来(き)られないし、お風邪(かぜ)でも引(ひ)かれましたか?」

びとつ。

少女のおでこが、俺のおでこと触れ合う。

えっ、なにこの展開。おっちゃん、風邪どころか元気になっちゃうよ!!

「調子が悪いようでしたら、神官のアーティアさんにお師匠様の体調を見に来るよういつておきますから。早く支度して会議室に来てください」

少女は執務室の奥にある部屋に駆け込み、何やら準備をしているようだ。

「もしかしてあいつ……。それに、アーティアっていったよな」

混乱しているはずの俺の頭が、やけに冴え渡っていることに戸惑いつつ、声をあげた。

「え、エステル!!」

「何ですか? お師匠様?」

扉から顔だけ出して少女が答えた。

「い、いや。俺はどれくらい遅刻しちったのかなー、とと思って」

「もう一時間以上ですつ。あと、本当に急に『俺』とかどうしたんですか? イメチェンするにしても似合わないと思います」

「そうか……な」

「はい、似合いません」

ズパツ、と少女エステルは断じた。

「お師匠様は、のほほんと『僕』とかいって、ふらふらへろへろもけもけしているくらいがいいです。『俺』とか似合いません」

(……僕。メテオの一人称だ)

「はい、お師匠様の杖持ってきましたよ。執務室にいても、杖くらいいつも身につけておいてください。魔術師なんですから」

そういつてエステルは俺に杖を押し付けた。

押し付けられるなら、おでこのほうが嬉しかった。

「エステル!!」

「えっ。あ、はい?」

「おでこ。もっかい」

前髪を上げてアピールする俺に、エステルの容赦ない平手打ちが飛んだ。

2 決意

「時間を守らぬのは、生徒たちにも影響を及ぼしますぞ」

「メテオ様、いくらなんでも遅すぎやしないでしょうか?」

「たまには遅刻するくらいの方が、愛嬌あいきょうがありますわよ、ね」

数十人は着席できる無垢板むくいたの机に着いていたのは三人。

俺はドアを開けるなり、それぞれのお言葉に出迎えられたのであった。

いずれもウォルスタの魔術師ギルドの中心人物で、確か名前は……

「メテオ様？ 聞いておられますか。いったい一時間も何をされていましたか？」

「ロルトじい！ お前はオリナス!! お前はフィリアだ!! 耳!! えるふみみ!!」

「えっ、あつ? ……あふんっ!」

俺はエルフのフィリアに正面から堂々と、ハグするように飛びかかつて、その両耳を両手で優しく、かつ電光石火でんくわうせきかの速さでタッチした。いいい、色っぽい声とか出してけつかる!!

×××

「……ごめんなさいもうしません悪いと思います許してくださいお願いします」

俺は会議室にある豪華なイスではなく、よく磨みがかれ手入れされたフローリングの上で土下座どげざをして、許こしを請こうた。

この三人は、俺が設定を作ったノンプレイヤーNキャラクターCだ。ひと目見るなり、感極かんごく

まっつことに及んでしまった。フィリアには悪いことをしたとは思っているが、反省はしていない。正直、スキがあればまたやってしまうかもしれない。

エルフ女性のフィリアは、俺を見下ろすも柔和にやわな顔をしている。

だが、そのアーモンド型の目は一筋の情けも帯おびびていない。顔は笑っているものの目がこうも笑っていない。本気で怒っている。

こういうときは土下座だ。見た目は子供、心はおっさんの俺の経験と本能が、最大限の謝罪をすべしと告げたのである。

武術の達人が行う型かたのごとき流麗りうれいな動作で、キング・オブ・謝罪である土下座をしたことに、フィリアを除く三人は毒気を抜かれた顔……というより、呆気あつけにとられた表情で俺を見ている。

「いかん、ちよつとマゾっぽい気分になってきた。そんな趣味はないんだが。」

「み、皆様すみません。メテオ様は魔法の研究に没頭ぼつとうしておられたようで疲れておいで……」

エステルが気丈きじょうにもフォローをしてくれる。

偉いぞ。さすが俺がギルド長補佐に任命しただけのことはある。

「う、うむ。メテオ殿も、日頃の疲れが溜たまっていたのじゃろう」

「度肝どじまんを抜かれましたが、メテオ様の年相応な無邪気むじゃぎさを見られましたな」

ふたりがそれぞれ俺に声をかけた。ひとりには白髪白髭白ロブといった魔法使い然とした老人——ロルトじい。ひとりは神官衣を身にまとった壮年の男性——オリナス。彼は手に魔術師の杖を持っている。

『ウォルスタ魔術師ギルドの三導師』

まさしく、俺が石井先輩と相談しながら作ったNPCに他ならない。といっても、俺が最初にコピー用紙に書き付けた設定は——

ロルト・バステイーユ 人間 男 65歳

数種のオリジナルスペルを開発した名門の魔法使い。

ギルドのご意見番。白い髭。いかにも老魔術師。

くらいだった。そもそも、キャラの設定とはゲームを進めるうちに、どんどん書き足されていくものだからだ。

そんなNPCたちが生身を伴って、俺の前で感情を表して動いて喋っているのだ。抱きついて感激を表現したくなるのが人情というものだ。

不覚にも耳を触られ感じてしまった(であろう)フィリアが、怖い笑みを湛えたまま深いため息をつく。

「メテオ様もお疲れなのでしょう……」

「許してくれる？」

俺は目を潤ませてフィリアの整った、エルフのかんばせを見上げる。つつい耳に視線がいつてしまうが、そこまではフィリアも気が付かないようだ。

「……もう、やめてくださいね。エルフの耳は敏感なんですから」

敏感なのか。それはいいことを聞いた。

エステルの視線が冷たい。

あいつは、どうもカンが鋭いようだ。子供キャラで押すのも限界がありそうだ。

「もうしません。それで、会議の内容というのは」

土下座を解除し、すつくと立ち上がって真剣な表情をつくり、一同を見回す。ここはギャップ押しで乗り切ろう。

「う、うむ。いつもは会議結果のみメテオ殿に報告しておりますが、此度は厄介な案件が国王から持ち上がりましてな」

白い髭をしながらロルトじい。

「期日はありますが、火急というほどのものではありません。メテオ様がお疲れのようなら、また明日にでも改めて」

と、気遣いをこめてオリナス。

「俺なら問題ないよ。大丈夫、教えて」

言ってから一人称が『僕』ではなく『俺』だったことに気がついたが、皆は取り立てて不審に感じなかったようだ。やはり、出鼻でばなのエルフ耳もみしだきがインパクト大だったのだから。

「国王様の例のアレですね。今度は農地に雨を降らせてほしいと令状が来ました」

「爺は、あまり国王が調子に乗って魔術師ギルドに干渉するのは如何かとは思うのじゃが、無下むげにもできずほとほと迷惑しとります」

（国王？ ウオルスタは、俺たちが作った自治領じちりょうだったはずだが）

「〈天候操作〉は、この国ではメテオ様しか使えぬ魔法ですので、今回は代理を立てるわけにもいかず、会議にお呼びすることになりました。無理にとは申しませんので、ご検討ください」

ロルトじいが、申し訳ないという感じで、軽く白い頭を下げた。

俺はいつも会議に出てるわけじゃないのか。好き勝手やらせてもらっているみたいだ。ありがたい。

「わかった。今日はちよつと体調が思わしくないから、明日までに結論を出しておくよ。でも皆にはいつも迷惑かけてるから、今回は俺がなんとかしたい」

俺も頭を下げると、皆がいくぶんギョツとしたふうであった。

「いやいや、メテオ殿に頭を下げられては『三導師』たる我々の立つ瀬せがなくなってしまう。ギルド長に雑事を押し付ける形で面目もない」

ロルトじい、お前まへいい奴だな。こんな生意気なまいきなガキにそんな接し方してくれるなんて、俺の作ったNPCとは思えない。

でも俺、さつきこんなの比じゃない頭の下げ方しているんだけど、それはスルー？

「しかし、国王も『ストームプリンガー』がいるからこそ、ギルドに無茶振りむちゃぶりをしてくるのでしよう。まったく礼節れいせつに欠けるやり方です」

「メテオ様が『メテオプリンガー』となったら少しは収まるでしょうけど……あつ、すみません。出すぎた言葉でしたわ」

オリナスとフィリアが、困り顔を見合わせて、愚痴ぐちをこぼした。

ん？ ストームプリンガー？ メテオプリンガー？ なにその固有名詞。俺知らないぞ。どうも俺が設定したものだけじゃないようだ。この夢……いや、夢じゃない。これはどうも現美まみくさい。耳の感触といい人物の個性といい、夢にしては生々なまなましすぎる。

「あー……そうだね。じゃあ俺は、自室でちよつと休んだあとで頭使うから、もろもろはエステルに伝えておくよ。それじゃあ」

「夢じゃない……となると、俺のいた現実世界の俺はどうなっちゃったんだ？」

執務室の奥にある扉を抜け、俺は私室に入る。そこに置かれたでかいベッドに身を投げつけて呟いた。

俺はよくマップとして、テーブルトークRPGセッション中にマップを描いていた。だからというか、必要のないところもあれこれと設定を作っては屋敷などの平面図を描きまくった。

ウォルスタの魔術師ギルドも簡単な平面図を作っており、それによれば執務室の奥はメテオの個人のスペース——私室兼寝室となっている。

俺の脳内マップとほとんど変わらない間取りであることは確認できた。

「しかし、リアルな作り込みだな……」

ベッドに敷かれた上質なリンネルの肌触りを確かめる。確かに俺は設定魔ではあったが、ベッドシーツの素材までは決めていない。俺が決めていない部分については、適当なところで折り合いがつけられているようだ。

考えることはたくさんあるが、自分が本当にメテオ、魔術師メテオ・ブランディッシュだとしたら、やってみたいことはたくさんある。まずは魔法を使ってみたくないじゃないか。魔術師だもの。

「……燃え上がれ。《点火》」

虚空に手を差し出し、頭に浮かんだ上位魔法語を口にする。

ぼむす！と軽い音かして、手のひらから炎が立ちのぼり、一瞬で消える。

「おお!! 使えた!!!」

今のは魔術師として初歩の初歩で覚える《点火》という魔法だ。攻撃に使うことはほとんどなく、暖炉や焚き火に着火するための簡単な便利魔法だ。

俺は、次々と頭に魔法を思い浮かべる。あれもこれも、どれも使える。10レベルの魔術師のみが使える超広範囲攻撃魔法である《隕石落とし》の魔法すら……え？《隕石落とし》使えるの!?

ということは、俺のレベルが本当に上がっているということだ。俺のキャラクターであるメテオ・ブランディッシュは、魔術師レベル9で止まっていたはず。

「げっ、あの経験点マジで使えたのか!？」

今度はキャラクターシートのことを念じてみた。

すると出てきた、醬油のシミつきキャラクターシート。俺が調子こいて取ったスキルやブーストしたパラメーターのままだ。

「しまった。これ、やり直しできないんじゃないか!？」

シャーペンと消しゴムで以前の状態に戻そうとするのだが、いくら消して書き直しても、じんわりと元のデータが浮かび上がってきて、元に戻ってしまふ。

「経験点を使いきらなくてよかったけど、今度からスキルを取るときには慎重に取らない

とな……くそっ、パラメーターはともかく、美しくないスキルの取り方しちまった」
 いくら経験点があろうと、効率がいいとかいろんなことができるからとスキルを取りま
 くるのは、俺のRPG美学に反する。

魔術師なら、取ったとしても、みつづくりのスキルで抑えておく。メインが魔術師だ
 としたら、サブにふたつくらいはスキルが美しい。ロールプレイもしやすいというもの。
 事実、俺は魔術師をメインに賢者スキルをサブに持っていただけだ。

……もつとも、サブを3レベル上げるくらいは余裕しかなかったのだが。

「魔術師レベルが17に、賢者はそのまま。そこに精霊使いと神官と盗賊スキルを10レベル
 とかチートすぎるだろ……俺」

パラメーターもガチで上げたが、こちらはまだ許せる。魔法の威力や効果を上げるため
 のINTと、魔法の使用回数を増やすためMNDを上げている。その他も全体的に上げて
 いるのは、オーバーレベルにふさわしい値だといえよう。

それよりも気になったのが、MNDを上げたことによる精神抵抗値の上昇だ。

『アヤタレウ』では、精神的なダメージや魔法などへの抵抗に、このMNDが関わって
 くる。

高ければ高いほど、精神的なダメージに強く、魔法抵抗力が増す。今の俺のMNDは平
 均的な冒険者の四十倍以上だ。

「もしかして、さっきから俺が冷静に行動できているのは、このMNDのおかげか？」

パラメーターの値で己の冷静さが決まるのは少し気味が悪いけれども、上げてしまっ
 たものは仕方がない。そこは便利であると割りきっておくことにした。

「ひとまず現状把握だな。ウォルスタも、俺の知っているウォルスタとはちょっと違うよ
 うだし、なんか王国領に組み込まれているみたいだしな。三導師から聞いた情報だけだと
 どうしようもない」

俺は自室からテラスに向かう。扉を開け放つと、心地よい風が全身をなでまわした。精
 霊使いのスキルも取ったせいとか、少し気をつけると風の精霊スピリットの存在も感じることができ
 る。(現状把握も大事だけれども、これだけは使っておきたいっていう魔法があるんだよ
 な。まだこれがリアルな夢だって可能性もある。楽しめそうなことは早いうちに試してお
 こう)

「我、風纏まきいて空高く。地上の軛くわを厭いとう者なり。《飛翔フイカウ》……！」

つま先が地面から離れ、えいといわれぬ浮遊感に包まれた。

(翔とべ!!)

歩くほどの気軽さで、俺はテラスから大空に向かって飛び立った。

(すごい！ すごい!! 俺、空飛んでる。楽しい、気持ちいい!!)

急上昇、急降下、旋回まが、きりもみ、宙返り。ありとあらゆる動きが念じるだけで自由自

設定では、《飛翔》^{フライト}を基本値で使うと時速六十キロくらいの速度が出るはずだ。法定速度を無視して吹かしまくった原付くらいのスピードだが、信号も障害物もない空、しかも自分の身ひとつで飛んでいると、もつとスピードが出ているような気がする。体感的には高速道路をオープンカーで飛ばしている感じだ。えらく体温を持っていかれる。

「《飛翔》^{フライト}の魔法を使うときは、気を付けないと風邪をひくな」

苦笑しながら、俺はテラスの手すりに腰掛けて、景色を一望する。

ウォルスタにある魔術師ギルドは、町のほぼ中心にある。

そして俺の私室は、ギルドの塔の最上階にあり、テラスからは町のほぼ半分を一望することができる。

先ほどの《飛翔》^{フライト}ではあまりの興奮のためよく見ていなかったが、改めて眺めてみるとなかなかいい町だ。

ちよつとした丘にほぼ真円の防壁を築き、きつちり東西南北に門を設けている。

東西南北の門からはまっすぐ石畳^{いしだみ}の道が延びており、すべてが中央で交差している。

無計画に作ったのではなく、なにもないところから、明確にどのように作っていくかを決めた町の姿だ。

「これが俺たちが作った町、ウォルスタか」

俺たちのパーティが高レベルになりすぎて、そこらの魔物退治ではちよつと退屈になってきた。

そう考えた石井先輩が、高レベル冒険者——というか高レベルスキル持ちにふさわしい立場と場所を与えるために、長期にわたって『町をひとつ作る』というシナリオを作ったのだ。

俺たちは数年を費やしてさまざまな設定を作成し、それにそって『ウォルスタ』という町を作り上げた。

魔術師である俺は主に魔術師ギルド——近隣にはなかった魔法の研究と魔術師の育成、そして冒険者のために広く情報や魔法の品物などを取引するための組織——を作り上げた。

他のメンバーも、それぞれ自分のスキルに合った役割を演じ、神殿の長や盗賊ギルドの長、あるいは自警団といったものをウォルスタの町に作っていった。

いわゆる冒険とは毛色が違ったが、自分たちのキャラクターではなく、町を育てていくという楽しみに、皆大いにハマったものだ。

ただし、代わりに俺も他の皆も町の重要人物となってしまうため、おいそれと冒険に出ることができなくなりました。

故に、いろいろと口実を作っては、冒険——近隣で見つかったドラゴンの洞窟や湖底に沈んだ遺跡の調査——に出たものだ。